

山上憶良における「世の中」について

下 田 忠

憶良の「令反惑情歌」（5・八〇〇）には次の序文が加えられている。

或有人、知敬父母、忘於侍養、不顧妻子、輕於脱履。自稱倍俗先生。意氣雖揚青雲之上、身體猶在塵俗之中。未驗修行得道之聖、蓋是亡命山澤之民。所以指示三綱、更開五教、遺之以訓、令反其惑。

この一篇の述作は、序に明らかなように、現実を逃避して山沢に亡命する民を戒め、これを教化しようとしたものである。この時憶良は、国守として筑前にあったことは、この一篇を含め「思子等歌」「哀世間難住歌」の左注に「神龜五年七月二十一日於三嘉摩郡撰定筑前国守山上憶良」とあるによってわかる。

序中の「指示三綱、更開五教」については、「悲歎俗道假合即難易去難留詩」の序にも、周孔之垂訓、前張三綱五教、以濟邦国。」とあって、「三綱」と「五教」にはそれぞれ憶良みず

から注を施し、前者には「謂君臣父子夫婦」とあり、後者には「謂父義母慈兄弟順子孝」とある。つまり、ここでは儒教の三綱（君臣、父子、夫婦）、五教（令義解では「謂五教者、五常之教、則父義、母慈、兄弟、弟恭、子孝是也。」となつてゐる）によって倍俗先生（老莊思想や道家の言説に惑わされて、俗に倍いて逃避しようとする輩）を教導しようというものである。養老律令の戸令「国守巡行條」に、国守の職責として管下の民衆を教化することが規定されているところから、この歌は戸令の「敦諭五教」にもとづいて、道義的、儒教的な教訓を目的として詠まれたものと言えるのである。

父母を見れば尊し 妻子見れば めぐし愛し 余能奈廻は
かくぞ道理 鶉鳥のかからはしもよ 行方知らねば……

「父母を見れば尊し」は、「五教」のうち「子孝」即ち子としての道徳「孝」を諭したものであろう。「妻子見ればめぐし愛し」については、まず「妻子」なる語が歌用語として使われているのは、憶

良作品中に四例(16・三八六五、5・八九二に二例、と本歌の例)、それを模したと思われる家持に一例(18・四一〇六)あるのみで、憶良独特の歌用語と考えられる。ここで「妻子」の「子」の方に重きをおくとすれば、これは親としての道徳「父義」を喻したものと云えよう。

憶良には「恋三男子名古日歌」を含めて「子等を思う歌」がいくつかある。そのいくつかに登場する「子等」と父との関係を見るとき、律令の徳目を消化するという当時にあつては稀れにみる精神的志向にもとづいて子に対する親の愛がうたわれている。つまり「罷り宴歌」(3・三三七)や「思三子等歌」(5・八〇二)および同反歌(5・八〇三)、また「老身重病經年辛苦 及思三兒等歌」(5・八九七)および同反歌(5・八九九) (5・九〇〇) (5・九〇一)、そして「恋三男子名古日歌」(5・九〇四)および同反歌(5・九〇五) (5・九〇六)などにおいて描かれる父の子に対する愛情と、本歌における儒教的父子関係のひびきとは幾分違ひのあることが感ぜられるのである。この相違は、本歌のばあい律令制下の官人、国守の任務としての「教諭」が先行したことによると思われる。「余能奈迦はかくぞ道理」というばあいの「世の中」とは、父母妻子という肉親への敬愛と慈悲、この絆を意味しており、それを「道理」とはつきり認識しているのである。儒教的な親子間の規範たる愛、戸令にいう「五教」にもとづく律令的徳目としての愛、これが官人憶良の職務として教諭すべき「世の中」であつた。したがって、極めて親念的な親子愛がこの場合の「世の中の道理」なのである。

奈良時代前期に活躍した山上憶良は、万葉集の代表的歌人の中でも、特に人生の現実を直視して詠んだ個性的な歌人である。彼は「思想的」であるとか「概念的」、あるいは「人生派」であるとか「生活派」であるとかの評語でいわれて来た。それらの多くは、彼の題材が現実の社会における生活的なものに求められ、彼の教養学識がいたるところにうかがわれるところからそう批評されるのが常であつた。憶良の題材は万葉集の歌人の中で著しく特異なのである。彼の歌に見える特殊な用語についても、その題材と無関係ではなからう。彼の歌中で特に使用頻度数多く特殊な歌用語としては、「すべなし」「世の中」「天地」「日月」「年月」「父母」「妻子」などをあげることができる。このうち「すべなし」や「世の中」は、対象となるさまざまな事柄の具体的把握を總括し抽象化して表現しているばあいが多し。また、「天地」「日月」「年月」「父母」「妻子」などは、相對する二つの概念語を並べて一語としたものが多いが、これも二つのものを一つに概括して表現するしかたが看取される。

これらのことは、憶良の歌用語における一つの特徴であるが、当面の課題は、そのうち特に使用頻度数多く、最も憶良の特質をものがたる歌用語の一つと思われる「世の中」を取りあげ、その歌中での用い方を通して、彼の「世の中」に対する考え方を具体的に考察してみようとするところにある。

注(1) 原文の引用はすべて岩波日本古典文学大系本による。但し、当面の語句「世の中」は底本の旧字体で記す。

(2) 新訂増補國史大系第二部2「令義解」卷二戸令国守巡行條の義解参照。

(3) 同右「戸令」国守巡行條に、「凡国守毎一年一巡_二行厲_一郡。觀_二風俗、問_二百年、録_二囚徒、理_二冤枉、詳_二察_二政刑得失、知_二百姓所_二患苦、敦_二諭_二五教、勸_二務農_一功。」とある。

(4) 阪下圭八「山上憶良における子等の問題」(「文学」昭和四十二年四月号所収)参照。

二

「世の中」なる語を、憶良が歌中でどのように用いているか、それを見る前に、万葉集中「世の中」なる歌用語の用い方において、それぞれの作者により時代により、おのずからなる相違が認められないであろうか。相違が認められるとすれば、万葉歌人中で憶良の占める特異な存在を確かめる一つの手がかりが得られるのではなからうか。

いったいに、万葉集中「世の中」の語句は、題詞、序、漢詩文中のものを除き、いわゆる歌用語に限れば、四十五例が数えられる。このうち作者・作年代の伝えられているもの、およびほぼ作年代が推定され得るものは、三十五例(仮称「在名歌」)あり、作者・作年代ともに未詳のものは、十例(仮称「未詳歌」)である。

在名歌中、作年代の最も古いとみられるものは、持統天皇の末(六九七)年の作と考えられる「柿本朝臣人麿、妻死之後、泣血哀働作歌二首」の長歌二首目の中の一例(2・二一〇)、および同歌の「或本歌」中の一例(2・二二三)であり、最も年代の新しいものは、天平感寶二(七五〇)年の作「大伴宿称家持下_二琴南右大臣家藤原二郎之妻_二慈母_二忠上_一」の左注をもつ挽歌中の一例(19・四二二四)、および同反歌中の一例(19・四二二六)である。

なお、未詳歌中の用例は、卷七(一三二二、一四一〇)、卷十一(一三八三、二四四二)、卷十二(二八八八、二九二四)、卷十三(三二六五、三三三六に二例)、卷十六(三八五〇)の合わせて十例である。

在名歌の用例は、人麿の作品中のものが藤原時代、憶良における用例を中心とする奈良時代前期、家持における用例を中心とする奈良時代中期、の三つに大きく区分し得る。なお、この三群と未詳歌中の用例との関連が問題となるが、ここではふれない。

ところで、在名歌中「世の中」の語句を多く用いている作者はとうであろうか。人麿に二例(但し、一例は同歌の「或本歌」中のもの)、憶良に九例あり、旅人二例、家持九例であり、この他はそれぞれ一例となっている。右の如く、歌用語としての「世の中」の使用数をみるに、憶良模倣の作歌傾向が指摘される家持を除けば、憶良が圧倒的に多い。さらに憶良の歌に付けられた題詞(5・八〇四)と序(5・八〇二)の中にそれぞれ一例あるのを加えると十一例に達する。

さて、在名歌中最も古い「世の中」の用例は、さきに述べた柿本人麿の挽歌中の一例である。

(2・二一〇)……榎の木の ちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 思へりし 妹にはあれど たのめりし 兒らにはあれど 世間を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に……(六九七年)

「柿本朝臣人麿、妻死之後、泣血哀働作歌二首」うち一首

この長歌には「或本歌」(2・二二三)があるが、同類歌なので

「世の中」の用い方は全く同様である。このばあいの「世間」なる語には、「人間は死ぬものという世の中の道理」（岩波古典大系注）との意味を内蔵している。

人麿のこの作歌からおよそ三十年後の七二八年、大宰帥として筑紫にあつた大伴旅人に次の歌がある。

(5・七九三) 余能奈可^{ナカ}は空しきものと知る時しいよますます悲しかりけり

人麿や旅人のこれらの作歌は、「人は死ぬもの、世の中は空しいもの」というこの人間世界の道理が、仏教的觀念として當時すでに行きわたつたことを実証しているのではなからうか。

「維摩經義疏」などに「虚仮」の語がしばしば見え、世間虚仮、の思想はすでに聖徳太子の標榜した「世間虚仮、唯仏是真」にあらわれている。人麿の用例「世間を背きし得ねば」において、彼は妻の死について明らかな認識を持っていて、言えよう。契沖はその代匠記精撰本で「無常ハ有爲ノ世ノコトワリナルヲ免レネハ、背得ヌトイヘリ」と述べている。仏教が次第に民間にも浸透しつゝあつたことは天武紀十四(六八六)年三月の条「詔、諸国每家、作三仏舎、乃置仏像及經、以礼拝供養。」持統紀六(六九二)年閏五月の条「詔、令京師及四畿内、講説金光明經。……詔筑紫大宰率河内王等二曰、宜遣沙門於大隅與阿多、可伝仏教。」持統紀八(六九四)年五月の条「以金光明經一百部、送置諸国、必取每年正月上玄誦之。其布施、以当国官物一充之。」などを見れば明らかである。こうした時代の趨勢にあつて、「世の中」ということばに人麿は「世間」という文字をあててさえている。彼の用例は「世間の無常なものである」という仏教の示す道理

を背き得ない人身であれば」の意で、明らかに死の仏教的認識があるとみてよからう。また、人麿には当面の「世の中」の用例歌とほぼ同じ六九七年頃の作と考えられる「柿本朝臣人麿從近江國二上旧時、至宇治河邊作歌一首」の題詞を持つ歌、

(3・二六四) もののふの八十氏河の網代木にいさよふ波の行く方知らずも

がある。「行く方知らずも」の句が、ただ写生的に実景を詠んだものか、水の流れに託してて人生の無常を慨嘆したものかについて従来いろいろ論評されている。この歌が題詞にある状況のもとに作られたとすれば、大津宮の廢墟に、歴史の推移の跡を静かに思うとき、「世間無常」はおのずから到達した心境であつたとも言えよう。けれども前述の日本書紀の記事にみる仏教の民間への浸透などから推測すれば、宮廷歌人としての入麿に仏典などの影響がないとは言切れない。そのうえまた、人麿歌集出の歌で、人生の無常を詠んだ歌として知られる

(7・二六九) 卷向の山邊とよみて行く水の水沫のごとし世の人われは

の如きものもある。「水沫のごとし」は、「金剛般若經」に「一切有爲法、如三夢幻泡影、如露亦如電、應作如響是觀。」とある。人麿の作品には、やはり仏教の示す「世間無常」の觀念が投影していると考えてよいのではなからうか。

以上のことから考えれば、人生を無常とする思想は人麿の時代にすでに仏教的觀念として知識人の中に受容されつゝあつたと考えられ、天才人麿がまずもって「世間無常」を表現するために仏典語の「世間」に着目したと考えて然るべきだろう。

仏教のいう「世間虚仮」「世間無常」の思想に影響されたと考え

られる人間世界の道理、それを意味する人麿の「世の中」が「世間」を背きし得ねば」の用例において披瀝されている、と思う。

この系列に属する用例を万葉集の、その他の歌人のものから取りあげてみたい。(年代順)

(5・八〇四) 世間の術なきものは年月は流るる如し…(一に云はく…咲く花の移ろひにけり余乃奈可はかくのみならずし)…余乃奈迦や常にありける…(七二八年、憶良「哀世間難住歌」一首)

(3・四四二) 世間は空しきものとあらむとそ…(七二九年作者未詳「悲傷膳部王歌」)

(5・八八六)(…)世間はかくのみならずし犬じもの道に臥してや命過ぎなむ(七三二年、憶良「敬和為熊凝述其志歌六首」うち一首)

(3・三五二) 世間を何に譬へむ…漕ぎ去にし船の跡なきがごと(七三〇年頃か「沙弥瀟誓歌」一首)

(5・九〇四) …胸うち嘆き手に持てる吾が兒飛ばしつ世間の道(七三三年頃か、憶良「恋男子名古日歌三首」うち一首)

(8・一四五九) 世間も常にしあらねば…(七三三年頃か「久米女郎報贈歌」一首)

(15・三六九〇) 与能奈可は常かくのみと別れぬる…(七三六年、作者未詳「到壹岐嶋、雪連宅瀟忽遇鬼病」死去之時作歌」の反歌)

(15・三六九一) …世間の人の嘆は相思はぬ君にあれやも…(七三六年「葛井連子老作挽歌」)

(3・四六六) …跡もなき世間にあれば…(七三九年「大伴宿称家持悲三傷七妾作歌」)

(3・四七二) 世間は常かくのみとかつ知れど…(同前「悲緒末」)

息更作歌

(6・一〇四五) 世間を常無きものと今そ知る…(七四〇年、作者未詳「傷三惜窠案京荒墟」作歌三首」うち一首)

(3・四七八) …咲く花も移ろひにけり世間はかくのみならずし…(七四四年「安積皇子薨之時、内舍人大伴宿称家持作歌」うち一首)

(17・三九六三) 世間は数なきものか…(七四七年、家持「越中国守之館臥病悲傷聊作此歌」)

(17・三九六九) …大夫われすら余能奈可の常し無ければ…(七四七年「更贈歌一首大伴宿称家持」)

(17・三九七三) …餘乃奈加は数なきものそ…(七四七年「大伴宿称池主」)

(19・四一六〇) …天地の遠き始よ俗中は常無きものと…(作年未詳、家持「悲世間無常歌一首」)

(19・四一六二) うつせみの常無き見れば世間に…(同前反歌)

(19・四二二四) …世間の憂けく辛けく咲く花も時に移ろふうつせみも常無くありけり…(七五〇年、家持「挽歌一首」)

(19・四二二六) 世間の常無きことは知るらむを…(同前反歌「大伴宿称家持弔下野南右大臣藤原二郎之喪三慈母忠上」)

以上、この系列に属する「世の中」の用例は二十一例、最初にあげた人麿の二例(但し一例は「或本歌」中のもの)と旅人の一例を合わせて二十四例である。未詳歌中でこの類に属する五例(7・一四一〇)(13・三二六五)(13・三三三六に二例)(16・三八五〇)

を合わせると、世間虚仮類(仮称)に属する用例は二十九例を数える。これは全用例の六割をはるかに越えるのである。

この類に属するものは、人麿の用例が「人間は死ぬもの人生は無常なもの」という道理を抽象的概念として「世の中」という一語に託しているのに対して、人麿後の作者たちの用例はどうであろう

か。「余能奈可よのなかには空そらしきものと知るときし……」(旅人)とか、「余乃奈迦よのなかにや常とこにありける……」(憶良)とか、「世間を何に譬たとへむ……」(池主)、「……跡あともなき世間にあれば……」(世間の常無きこと)、「……」(家持)等々で明らかな如く、入麿後の作者たちの歌は、「世間無常」「世間虚仮」の概念の説明に流れているばかりが多い。これは歌用語のはたらきからすれば、や、後退しているし、それだけ「世の中」なる語句の重みが減少し、同時に感動がうすれることになる。この原因は、「世間無常」という既成の観念が歌人たちの中に浸透するにつれて、それがみずからの体験によって裏付けされ、認識されては来たものの、結局は未消化のまま観念の説明に流れてしまった結果であろう。

一方、「世の中」の用例として次のようなものがある。

- (5・八九二) ……里長が声は寝屋戸まで来立ち呼ばひぬ斯くばかり術無きものか世間の道(七三二年頃か、憶良「貧窮問答歌一首」)
- (5・八九三) ……世間を憂しとやさしと思へども……(同前の反歌)
- (5・八九七) ……世間の憂うれけく辛からけくいといとのきて痛いたき瘡かさには鹹しほ塩しほを溜ためくちふが如く……(七三三年、憶良「老身重病経年辛苦、及思三兒等二歌七首」うち一首)

この三例は、「世の中」を苦悩にみちたもの、憂うれけく辛からけきものと観じ、それが人生の現実であると強く認識している例である。老病貧ふるといった人間の免れざる辛苦を「世の中の道理」とするこの用例は、いわゆる「世間苦」のうち死別、愛憎を除いた狭義の世間苦類(仮称)である。この類に属する用例は、憶良のこの三例のみであ

る。

同じ世間苦といっても、恋の苦しみを歌ったものがある。このばあいの「世の中」の用例は、平安朝における「男女の世情よこころ」といった意味のことば、その語源となったと考えられるものである。

(5・八一九) 余能奈可よのなかには恋こひ繁さかしゑや……(七三〇年、豊後守大伴大夫「梅花歌三十二首」うち一首)

(15・三七六) 与能奈可よのなかにの常とこの道理かくさまになり来きにけらし……(七三九年「中臣朝臣宅守与三狭野弟上娘子」贈答歌)

(4・七三八) 世間の苦くるしきものにありけらく恋こひに堪たへずて……(作年未詳「坂上大嬢贈家持」歌「うち一首」)

さらに未詳歌中の二例(7・一三三二)(11・二三八三)がこの男女の世情類(仮称)に属すると考えられ、合わせて五例である。

(3・三四七) 世間の遊びの道にすずしくは……(七二九年、「大宰帥大伴卿讚酒歌」)

(4・六四三) 世間の女をんなにあらば……(作年未詳「紀女郎怨恨歌」うち一首)

この二例と未詳歌中の一例(12・二八八八)の合わせて三例は、「世間普通一般」といった意味のものとして一系列を成している。この系列に属することばとして、「尋常よつね」がある。

(8・一四四七) 尋常よつねに聞くは苦くるしき呼子鳥……(七三二年「大伴坂上郎女歌」)

尋常類(仮称)に属する「世の中」の用例はさきあげた三例である。

このほかに「世の中」の用例として次の如きものがある。

(3・四二〇) ……天地に悔くしき事の世間の悔くしきことは……(作年未

詳「石田王卒之時、丹生王作歌一首」)

これは「世間で特にとりたてて、世にも」の意であり、下に打消のことは伴って使われる「世に」(20・四三二)とか「世にも」(12・三〇八四)(14・三三六八)(14・三三九二)などの用例の語と一系列を成すものである。この系列に属すると考えられるものに、虫麻呂歌集中の一例(9・二七四〇)と未詳歌中の二例(11二四四二)(12・二九二四)があり、したがって、世にも類(仮称)に属する「世の中」の用例は、合わせて四例である。

以上万葉歌中の「世の中」なる語を分析した結果をまとめると、「世間虚仮類」が二十九例、「世間苦類」が三例、「男女の世情類」が五例、「尋常類」が三例、「世にも類」が四例、ということになる。これらはさらに二群に大別されうと思う。つまり前二類は「世の中」に対する作者の考え方に立った分析のしかた、いかえれば、使用に際して実際にはたらく作者の言語意識においてとらえられる概念的な意義の観点からの分析のしかたであり、後の三類は、史的な変遷を内蔵した言語の派生的意義の観点からする分析のしかたである。これは、分析の観点の違いとして指摘しうるが、実は、使用の伝統によって獲得された実際のな意義に本質的な違いがあると考えられるのである。

ところで、「世の中」の用例として最も多かった「世間虚仮類」については、作者明記の万葉歌中で最初に用いた人麿から、それ以後万葉末期の家持に至るまで、万葉全期を通じてこの用例が散在するのである。このことは、仏教伝来以来、上代人の精神を大きく動かしたる人生観が、とりもなおさず世間虚仮の思想であったことを立証している。山上憶良もその例外ではなく、さきに見た如く彼の

筑前守時代の作歌中で四例、上京後おそらく死に近き頃のものと思われる「恋三男子名目」歌」中で一例と計四例がこの類に属する。

また、「世の中」の用例として、万葉集中で憶良独特のものと考えられる「世間苦類」の三例と、冒頭にあげた「令反三感情歌」中の一例、この四例によって彼の特異な存在が浮き彫りにされる。同時に、憶良の歌には、「男女の世情類」が皆無であること、「尋常類」「世にも類」に属する用例も一切ないということも特筆すべきことである。

注(1) 加藤咄堂講「聖徳義疏維摩經大講座」参照。

(2) 「上宮聖徳法王帝説」所引の天寿国曼荼羅幀帳銘に見える詞句といわれる(堀一郎「我が国民間信仰史の研究」P91参照)。

(3) 上田万年監修契沖全集第一巻「万葉代匠記巻二」参照。

(4) 飯田季治「日本書紀新講」下巻参照。

(5) 昭和新纂國譯大藏經經典部第四卷「金剛般若波羅蜜經」

P283参照。

三

在名歌中「世の中」の語初見の人麿歌(2・二一〇)から、最後の家持の歌(19・四二二四)までの期間は、およそ半世紀におよぶ。この間、おのおのの作者がそれぞれの歌の中で「世の中」なる語をどう用いているかを見ることによって、その作者が「世の中」に対してどういう考え方を持っていたか、どういう人生観を持っていたかを知る手がかりが得られるように思う。

その中で、山上憶良の「世の中」の用例は、世間虚仮類と世間苦

類にのみ分類されること前述の如くである。

まず世間虚仮類について考察をすめたい。この類に属する憶良の用例は五例で、うち三例は「哀世間難住歌」(5・八〇四)中のものである。この歌の序に「易集難排、八大辛苦」の表現が見える。この「八大辛苦」について契沖は「代匠記」精撰本で「八大辛苦。八苦、生、老、病、死、愛別離、怨憎會、求不得、五陰盛。」と述べている。これは「大般涅槃經」で「苦諦」を説いている部分の初めに、「八苦」を明らかにして「所謂生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦。」とあり、その他の仏典にも説かれていることで、仏典の影響が明白である。世間の術なきものは年月は流るる如し 取り続き 追ひ来るものは 百種に 迫め寄り来る

契沖はこの冒頭の八句が一篇の大意だとしている。たしかにこれだけで本歌の主旨を言い尽している。以下、歳月がいかに早く流れ、それに伴ってどういふ変化がもたらされるかを説明して行く。

…蟻の腸 か黒き髪に 何時の間か 霜の降りけむ 紅の 面上に 何處ゆか 皺が来りし (一に云はく、常なりし 笑まひ眉引 咲く花の 移るひにけり 余乃奈可は かくのみならし) 「一云」の六句は、右にあげた八句に替るものとする説、作者がその八句を六句に改作したとする説、またこの六句は前の八句に続く本文とみる説とある。いずれにしても、憶良の「世の中」を見る目に変りはない。永久にあるものの如く見えた笑顔や美眉も花が移るう如く変化してしまった、これが人の世の常である、との意である。

大夫の 男子さびすと 劔太刀 腰に取り佩き 獵弓を 手握り持

ちて 赤駒に 倭文鞍うち置き 俯ひ乗りて 遊びあるまし
余乃奈迦や 常にありける

「や」は反語と解すべきで、赤駒に乗って遊びまわつた人生は、いつまでもそのままあるものではない、というものである。以上「世の中」三例について見てきたが、これらの用例は、その題詞にすでに示されている主題、つまり「世間無常の慨歎」を表出するために用いられたものばかりである。また、反歌

常磐なす斯くしもがもと思へども世の事なれば留みかねつとも
は、この一篇の核心を端的に言い切っている。「代匠記」精撰本で「世の事」について「余能許奈禮婆トハ、限アル世ノコトナレハト云ナリ。」と言う如く、無常は「世の理」だから人間の力をもっては何ともしがたいという考えが憶良の心に深く刻まれていたようである。彼の生死観についてうかがわれるところである。なお、この憶良の「哀世間難住歌一首并序」は、のちに家持の歌と考えられる「悲世間無常二歌一首并短歌」(19・四一六〇―四一六二)に多大な影響を与えている。

次に「敬和_下為_二熊凝_述三其志_歌上六首并序」のうち長歌一首中の用例についてみよう。その序に「傳聞、假合之身易_レ滅、泡沫之命難_レ駐」との表現が見える。「假合」とは地水火風を仮に合せし身の意で、いわゆる四大假合のことで、「維摩經」の文殊師利問疾品第五に「四大合故假名為身」とある。この語はやはり憶良の「悲世間無常二歌一首并短歌」の「假合」とも見える。また、「泡沫之命」は「金剛般若經」に「一切有想法、如三夢幻泡影、如露亦如電。」云々とあり、このことはやも思想はすでに入麁歌(7・一二六九)にも見えること前節で述べた通りである。ところでこの歌

は、序にうかがわれる如く、憶良が熊凝の孝心に感激して、作ったものである。

：玉杵の 道の隈廻に 草手折り 柴取り敷きて 床じもの うち臥伏して 思ひつつ 嘆き臥せらく 國に在らば 父とり見まし 家に在らば 母とり見まし 世間は かくのみならず 犬じもの 道に臥してや 命過ぎなむ

「世間はかくのみならず」の句は、直前の「國に在らば：家に在らば母とり見まし」の句に続いて直後の「犬じもの：命過ぎなむ」の句の両句で述べる「不幸な死」を「世間」の語によって概括して述べたものである。契沖は「代匠記」初稿本で「世の中はかくのみならず。生者必滅、合者常離、愛別離苦、これそのことほり、世のならひとしてかくのみにあるらしなり。」と、仏教の道理として説明しようとしている。憶良は十八才の少年熊凝の客死をあわれみ、父母から遠く離れて犬の如く道に臥して命終ることを「世間」と観じたのである。「命過ぎなむ」の「過ぐ」は、死ぬ、みまかるの意で、人麿の歌にも用例（7・一二六八）がある。「命過ぐ」については、小島憲之氏によるとその例は觀心寺阿彌陀佛造像記に「為_二命過名伊之沙古而其妻名汗麻尾古_一、敬_三造彌陀佛像_二」とあり、憶良の愛読した「金光明最勝王經」長者子流水品に「同時命過生三十三天_二」と見え、憶良は仏典語を翻訳して歌語として採用したものであるとういわれる。雄略紀九年三月の条に「臣婦命過之際_{（6）}と見えるが、これは飯田季治氏の「正訓」によれば「命過_{（6）}」と訓読している。憶良の「命過ぐ」は、やはり仏典語の翻訳語と考えられる。なお万葉集中で歌用語として「命過ぐ」を用いたのは、憶良のこの用例ただ一つである。

憶良の世間虚仮類、もう一つの用例は「恋_二男子名古日_一歌三首」うち長歌一首中のものである。左注に「右一首、作者未詳。但、以_二裁歌之體似_一於山上之採_一、載_二此次焉_一。」とあって、「右一首」とあるのは（5・九〇六）の短歌一首をさすのか、長歌一首を主として短歌二首はおのずから含められるのか、異論もあるところだが、一般には後者の説が行なわれ、長歌を含めた三首全体が憶良の作品と認められている。「古日」が憶良の子ではなかったとする説があるが今はふれない。

天神地祇を祭り祈った効もなく、日々に衰弱して行って遂に愛する子「古日」の命は絶えた。「立ち踊り 足摩り叫び 伏し仰ぎ 胸うち嘆き 手に持てる 吾が兒飛ばしつ 世間の道」、狂乱と絶叫の中で、愛児との苦しい死別を「世間の道」として、かなしくも諦めようとしている。生から死への変転は人間の宿命であり、死をのがれさせようと祈って報いられず、どうにもならぬ死に直面し悲嘆にくれるこの人生のことわり、「世間の道」はこのような悲しい人間の生死の道理を述べているのであろう。

憶良はここで天神地祇に祈っているが、一方この長歌の冒頭には、「世の人の 貴び願ふ 七種の 寶も われは何為む：」とあり、「七種の寶」は即ち七寶で、阿彌陀經や法華經でいう七種類の寶を言っているし、また反歌をみれば仏教思想から来たと考えられる語句と、古来の神祇崇拜から来ていると考えられる語句との混用が目立つのである。反歌、

若ければ道行き知らじ幣は為む黄泉の使負ひて通らせ

布施置きてわれは乞ひ禱むあざむかず直に率去きて天路知らしめ
「幣」は神に奉る物であり、「黄泉の使」は冥土を通う使者、「布

「施」は仏典語で仏や僧に捧げるものである。「天路」については死者昇天の思想は日本古来のもの、あるいは仏教上の天上をいったもの、と説が分かれるが、それはともかく、ここでは仏教語が我が国固有の神祇思想の中に取り入れられて、神仏混淆の観を呈している。神仏混淆の表現は、憶良には他に例がいくつかある。たとえば「沈獨自哀文」には「所以礼_レ拜_三寶_三、無_二日_レ不動_一」毎日講義 卷「敬_三重_二百神_一、鮮_三夜有_レ開_一」神守記とあり、文字通り解すれば、神仏を日夜崇敬祈願していたことになる。

神仏混淆だけでなく、彼の作品には儒仏混淆も見える。たとえば「悲_三歎_二俗道假合即離易_レ去難_レ留詩_一」の序に「竊以、釋慈之示教、先開_三三歸_二五戒_一、而化_三法界_一、周孔之垂訓、前張_三三綱_二五教_一、以濟_三邦國_一。故知、引導雖_レ二、得_レ悟惟_一也。」と述べている。憶良が儒教思想を反映した政治機構の中で、善良な国守としてはたらいたであろうことは「令_レ反_三惑情_一歌」においてさきに見た。律令の戸令国守巡行條などに見える如く、儒教思想を支柱とする政治が行なわれる中で、仏教が朝廷の保護、奨励によりしだいに国家的な宗教として興隆し、仏教思想が古来の伝統的神祇思想と交錯する複雑な精神生活のただ中におかれた憶良が、ここに見出せるのである。特に官人憶良が、みずからの職務としての儒教道徳と、思想界を風靡した仏教思想、それに日本古来の神祇思想との対立混乱にどう対処し、みずからの内部でどのように調和統一して、憶良独自の世界観(人生観として止揚して行ったか、憶良の作品(特に「世の中」なる歌用語の用い方)を通してその時代の思想文化の一典型を見ることが出来るのは興味深いことである。

注(1) 昭和新纂國譯大藏經經典部第五卷「大般涅槃經」P.290參

照。

- (2) 澤瀉久孝「万葉集注釈」
- (3) 井上通泰「万葉集新考」
- (4) 尾山篤二郎「山上憶良」(「作者別万葉集評釈」第四卷)
- (5) 昭和新纂國譯大藏經經典部第六卷「維摩詰所說經」P.492參照。
- (6) 小島憲之「上代日本文学与中国文学」中巻參照。
- (7) 飯田季治「日本書紀新講」中巻P.408參照。
- (8) 土屋文明「万葉集私注」澤瀉久孝「万葉集注釈」など。
- (9) 吉永登「古日は果して憶良の子か」(「万葉—文学と歴史のあいだ」所収)
- (10) 佐佐木信綱「短歌読本山上憶良」
- (11) 注(2)に同じ。
- (12) 持統紀八(六九四)年五月の条(前節の注(4)參照)の記事。および「續日本紀」聖武天皇神龜五(七二八)年十二月の条「金光明經六十四帙六百冊卷頒_三於諸國_一。々別十卷先_レ是、諸國所_レ有金光明經、或國八卷、或國四卷、至_レ是寫備頒下。隨_三經到日_一、即令_三轉誦_一。為_レ令_三國家平安也_一。」の記事などにてわかる。なお續日本紀の記事は新訂増補國史大系第一部3「續日本紀」前篇P.114~P.115參照。

四

次に憶良の「世の中」の用例のうち、世間苦類について考察をすめたい。まず「貧窮問答歌」中の用例についてみよう。その前に、この問答歌と陶淵明の詩との関係については諸家の指摘するところ

である。たとえば「万葉集大成」所収の杉本行夫氏の論考、雑誌「アララギ」（昭三一・六）所収の清水房雄氏のものなどがあり、特に清水氏の論考は「日本文学研究資料叢書・万葉集一」にも収められているもので詳細をきわめている。上代人が陶淵明の詩に接したのは主として「文選」所収のものであった。ほかに確実な伝来書として「芸文類聚」があげられるが、杉本氏や清水氏が「貧窮問答歌」への影響を指摘する「詠貧士」（七首）は「文選」も「芸文類聚」もその一部分（文選は其一、芸文類聚は其一と其四）しか載せず、両方とも憶良の類似句に当らない部分のみを収めている。したがって、もし憶良が「詠貧士」をもとにしたとすれば、七首とも揃えた「陶淵明集」が伝来していたと考えなければなるまい。土屋文明氏は芸文類聚「貧」の条にある晋東哲の「貧家賦」と貧窮問答歌との影響関係を指摘している。杉本氏などの指摘する「詠貧士」は「貧家賦」の影響を受けていること明らかなゆえをもってすれば、双方とも憶良は目にしていたのではないか。いずれにしても、民衆の貧窮を強調するために陶淵明の詩、芸文類聚、その他の漢籍の語句を利用していることは確かである。さらに用語の面では漢籍からの引用と思われる語以外に日常語が採られていることが目立つ。この長歌には全用語の四分の一にあたる孤語を持つこと、しかも孤語のうち、万葉集中の貴族官僚層の作者なら多分作歌中にとり入れることを避けるだろうと思われる語（糟湯酒、檉櫓、伏慮、粟、かまど、取りつづしるひ、炊く、呻吟ふ、鼻びしびしに等）は、孤語の半数に達していることは注目すべきである。これらの用語における特異性はどこから来るものであろうか。おもうに彼の環境や性情がその要因と考えられないであらうか。ここで憶良の閱歴をふり返る

に、憶良の姓「臣」は、天武天皇十三年に改訂の八色の姓では第六位にあたり、卑姓の貴族であったことが知られている。その彼が「續日本紀」文武天皇の大寶元年春正月の条で、「以三守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人爲三唐執節使」、元位山於憶良爲三少録。」とある遣唐少録に任ぜられた。無位の憶良が少録に拔擢され、後に伯耆守あるいは東宮（聖武天皇）の侍講となり、晩年に筑前守として活躍するに至るためには、異常な努力がはらわれたと推測されるし、長い年月がかかっている。彼の苦悶の閱歴はそのまま彼の性情の要因となり、学才がそれに拍車をかけて生成されたのが彼の作品であらう。とりわけ「貧窮問答歌」において用いられている漢籍語類、日常語類の性格の特異性は、体験から来る性情と、並々ならぬ努力を要して蓄えられた学識との反映として注目すべきであらう。貧窮問答歌における表現は、万葉集の他の代表歌人たちに比べて、彼の恵まれなかった環境を最もよく示しているといえよう。憶良の周辺には「貧窮」がつきまといっていた。困守となる前の彼自身の貧窮体験については知るすべもないが、困守としての彼は、その職務として地方巡行に際し自らの眼前に民衆の「貧」を見ることになり、その感動はやがてこれを題材として歌に結晶させることになったものと思われる。

さて、この問答歌の問者に憶良自身が、答者には永年の彼の官僚生活の対象であった民衆が意識されているとも考えられる。しかし憶良の志向は問者答者の双方に投影されているし、むしろ答者の方に彼の意志はより強烈に響きわたっている感がある。答者においては、人並に耕作しているのに、必需品の衣・食・住は絶無の状態がつづいている。この不合理は人間として憤らずにはいられないこと

である。そのうえ「楚取る里長が声は寝屋戸まで来立ち呼びひぬ」である。不合理の由って来るところを知っている民衆の心を身に体して、憶良は「斯くばかり術無きものか世間の道」とうたったのである。「いとのきて短き物を端截ると云へるが如く」は、「老身重病経^レ年辛苦、及思^三兒等^一歌」(5・八九七) 中では、「いとのきて痛き瘡には鹹塩を滯^レちふが如く」とあり、さらに「沈痾自哀文」には「諺曰、痛瘡滯^レ塩、短材截^レ端」とあって、当時広く一般に行なわれていた諺の引用であったことがわかる。憶良はその諺をここでは「楚取る里長」の苛酷さをたとえることばとして引用しているのである。このような諺をここに引用したという事実は何を物語っているのか。最下層の土民たちの腹の底からなる苦痛、憤怒、抗議の声が抑圧された呻吟となつて聞こえてくる思いがする。その呻吟が、短歌として結集しているのを見る。

世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば
苦惱多い人生を「世間の道」として、つまり人生の嚴然たる事実として歎き諦め、かつ肯定して生きて行くほかないというのである。憶良の処世観がうかがわれるところである。

世間苦類のもう一つの用例は「老身重病経^レ年辛苦、及思^三兒等^一歌」うち長歌一首中のものである。この長歌は、老後、病いの苦患にうち沈む憶良が、観念や知識の介入をゆるさず、直接の体験を表した歌であり、したがって彼の本心が如実にうかがわれるのである。老病死苦がそのまま現実となつた今、「世間の憂^レく幸^レけく」とその現実を直視し慄慄しているのである。苦悶こそが人生の現実の姿であることを体験によつて覚つたのである。ところで、人の世の「一切皆苦」の摂理をみずから実証し自覚しながら、最後の詠出

は「ことことは死ななと思へど五月蟬なす騒く兒どもを打棄てては死は知らず見つつあれば心は燃えぬ」となり、愛兒への断ちがたい愛執、煩惱によつて、悟道には至らずただひたすらなる愁訴に終っている。憶良は晩年のこの悲境に直面して「かにかくに思ひわづらひ哭のみし泣かゆ」と長歌を結び、結局、救われようのない沈痛慄哭あるのみなのである。

注(1) 杉本行夫「万葉集歌と中国韻文」(万葉集大成7・比較文学篇所収)

(2) 清水房雄「貧窮表現の一類型」(「アララギ」昭和三十一年六月号所収)

(3) 續國譯漢文大成文学部十二「文選」卷十五P.97 参照。

(4) 同前・文学部六十九「陶淵明集」卷四P.210~P.220参照

(5) 土屋文明「貧窮問答歌と貧家賦」(「アララギ」昭和三十一年二月号所収)

(6) 高木市之助「周辺の意味」(「国語国文」昭和三十年五月号所収)

(7) 新訂増補國史大系第一部3「續日本紀」前篇P.9 参照。

五

未詳歌中の「世の中」の用例と憶良作品中の用例との前後関係についてここで考察する余裕はないが、谷響氏の指摘のように、もし卷十三所収の未詳歌が憶良の活躍時代の作品以前のものとするなら、その未詳歌中の用例と人麿作品中の用例との前後関係が問題になる。これについては確たる根拠はつかめないのが現状である。谷氏が憶良活躍時代以前のものとして推定せられる卷十三所収の歌、その未

評歌中の「世の中」三例（三二六五）（三三三六に二例）を見るに、いずれも世間虚仮類に属するものである。いま仮にこの「世の中」三例を用いた未評歌二首を憶良以前のものと仮定しても、この二首が人麿の用例以前の作品だとの確証が得られない現状では、

「世の中」を歌用語として取り入れた作者は人麿が最初だと考えるほかはない。したがって前述（第二節）の考え方に立って、世間虚仮類に関しては、一応人麿の歌用語としての取り入れ方が基盤となつていてとみてはば間違いないまい。人麿の用例からそれ以後家持に至るまで、つまり万葉全期を通じて世間虚仮の用例が散在することは前に見た通りである。憶良は人麿の作品を読んでいたと考えられるから、その影響によって「世の中」の取り入れ方を踏襲したとも考えられよう。あるいは直接刺激を受けたのは、時を同じくして筑紫歌壇にあった大宰帥大伴旅人であったかも知れない。旅人が神亀五（七二八）年六月二十三日「報三凶問歌」において「世の中」の語を彼としてはじめて使用しているに對し、憶良がただちにそれを追うように同年七月二十一日「哀三世間難住歌」において歌中に三例、題詞に一例の合わせて四例も使用したのである。

ところで、憶良は「沈疴自哀文」をはじめその漢詩文に仏典語を多く用いる。歌に付された序文において仏典語をかなり指摘できることについては、すでに見て来たところである。彼は仏典語を翻訳して歌語として採り入れる術を心得ていたものとみえ、「敬和_二爲_一熊凝_三述_二其志_一歌_上」で考察した「命過ぐ」などもその一例であった。

「世間」なる語もそもは仏典語である。聖德太子が「維摩」。「勝鬘」。「法華」の三經を講じ、中でも特に傾倒したといわれる「法華經」だけを見ても、「世間」なる語は私の調べた限りでは三十例

以上の用例を見る⁽³⁾。憶良の漢詩文に引用されている故事成語の典拠のうち仏典だけに限ってみても「金光明經」「涅槃經」「維摩經」「長阿含經」それに「法華經」などが指摘されている。

憶良は、人麿を踏襲したか、あるいは仏典語を翻訳して独自の歌用語としてかくも多くの用例に結実させたか、そのいずれにしても、仏教的世界観が彼独自の世界観に及ぼした影の大なることを、この語句の用例によって確認することができるのである。「哀三世間難住歌」や「敬和_二爲_一熊凝_三述_二其志_一歌_上」あるいは「恋三男子名古日歌」における世間虚仮類の用例は、いわゆる仏教的濟度をともなつた眞の信仰を示しているとは決して言えないものであった。むしろ、彼において仏教の示す世界観は単なる厭世的情念を醸成し、ますます深い苦悶にうち沈む要因になつていふと云つてよい。

一方、万葉歌中で他に例を見ない用例がさきに見た如く、「令_レ反三感情_一歌」中の一例と世間苦類の三例であった。ここに万葉集における憶良の特異性が裏付けされる。これらは全く憶良独自の境地をひらいたものといえよう。「令_レ反三感情_一歌」における教誡教化をねらいとした道義的儒教的な要素をもつた用例は、憶良自身の用例のうちでも特殊な存在である。「貧窮問答歌」_二老身重病_一經_二年辛苦_一、及思_二兒等_一歌」における用例は、純粹に憶良独自のもので、彼の人生觀を如実にうかがわせる。「貧窮問答歌」において、憶良は貧窮を矛盾として自覚し、長歌の最後ではその矛盾の根源に對して抗議をさえ発しようとしている。だが、肝心の抗議の表現は「斯くばかり術無きものか世間の道」となるのであり、「術無し」という言葉が、かくしきれぬ消極性を表出することになつており、さらに「世間の道」によってそれは決定的となる。ここでは貧窮者の

生活も、里長の暴挙も、これを「世間の道」として容認し、諦めによって調和させてしまっている。苦悩を越え現状の壁を破る術をもたず、矛盾の根源に順応し、やむなく現実をそのまま肯定することを強いられた人間像を想定するほかはない。それは反歌「世間を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば」によって一層強調される。

憶良は、現実を自己の宿命として諦め、その諦めを基盤としながら、止むにやまれぬ憤りを抑えることができない。その憤りはしかし自己の宿命に対する憤りである、と思う。彼は、その憤りを生きる力の根源として生きて行こうと決意しているのではなからうか。「老身重病経年辛苦、及思兒等歌」において、苦悩から脱却できる死を思うのであるが、兒等を理由に、生への妄執ともいふべき心境を述べる。この一篇は、天平五年六月丙申朔三日戊戌作とあり、憶良の作歌の日付ある最後の歌である。この年のうちに憶良は亡くなったと考えられている。その反歌では「水沫なす微き命も柀繩の千尋にもがと願ひ暮しつ」とうたい、「水沫なす微き命」という生命の無常を識りつつも、永生を願うが如く、素朴な信念の範疇に低迷し、理念化されたいわゆる仏教的諦観にはほど遠い実感を述べるのである。

憶良は、世間虚仮類においてみた如く、仏教の示す「世間無常」の道理を觀念として理解し受容していた。觀念としての「世間無常」の認識は、単に厭世的情念を生み、かくして「貧窮問答歌」における用例の如く憂げく辛けきは人生の宿命、即ち、いわゆる「苦諦」として包括止揚され、彼独特の人生観として形成された、と考えられるのである。かかる憶良独特の人生観が形成された要因につ

いては、彼の閱歴をはじめ、その生きた時代社会を抜きにしては語れない。つまり「時代の子」としての要因が考えられよう。

外来の仏教、儒教、それに伝統的な神祇信仰と、さまざまな思想に影響を受け、精神的遍歴の結果、最後まで憶良の脳裡からは觀念と実感との混沌が払拭し切れなかつたようである。そして遂に仏教的悟道、つまり「滅諦」の境地には到達し得なかつた。憶良の辞世の歌と考えられる「山上臣憶良沈痾之時歌一首」

士やも空しかるべき萬代に語り續ぐべき名は立てずして
において、彼は抑えがたい実感を、このような生への執着としてうたつた。悟ろうとして悟り得ない、そこに生まれる苦悶の深淵からの叫びである。七十四才の憶良は煩悶のうちに他界したと考えられるのである。

注(1) 谷響「憶良と前代歌謡」(歴代歌人研究2「山上憶良」所収)

(2) 昭和新纂國譯大藏經經典部第一卷「妙法蓮華經」参照。

(昭和47年4月5日稿)

(新居浜高専助教)